

基本的な正常状態の圖式が問題とされているのであるから、實際の市場金利がそれほど明確に独自の動きをするとは見られ難いとしても、それは少しも著者の理論的主張を否定することにはならないであろう。しかし二つの資金は実際には混合して流れ、それに應じて二つの金利水準もまた相互に交渉しあうのであるから、それによる流通経済的不均衡の発生および種々の要因の變化に伴うその均衡回復過程については、銀行貸出政策の基準を指摘することとは別に、相當の説明が加えられなければ讀者に對して不親切であるといわなくてはならないであろう。なお資本金子論については、古典學派的な貸付資本の需給による利子決定論が採用されるべきであり、Keynes 的な流動性選好利子決定論は單なる利廻論にすぎないとされている。

第4章ではすでに觸れたように貨幣市場における商業銀行の信用造出の限界が吟味されるが、この部分の論述は本書の他の部分のそれとはそれ程深い交渉をもっていない。

第5章では貨幣市場と資本市場との區別に基づいて、「一般理論」における有效需要の原理と投資乗數論とに關する極めて異色のある解釋が行われている。すなわち有效需要の原理における投資は著者のいわゆる新投資財の販賣過程における投資であり、したがってその資金は資本市場の資金であるが、これに反して乗數理論でのそれは新投資財の生産過程における經營資金の使用を意味するものに他ならないと主張されるのであるが普通の解釋とは異っている。しかしこれはいう迄もなく著者の積極的な見解であり、「一般理論」を金融理論として翻譯するための一つの工夫であろう。その主張の意義についてはそこから展開される著者自身の理論的分析と相俟って評價せられる必要があるであろう。

有效需要の原理における投資をこのように解釋するところから、たとえば Malthus の資本蓄積論における有效需要不足論の要點は、資本市場の貯蓄貨幣を貨幣市場の經營資金として誤用することにかかわるものであり、また Say の法則は兩市場の資金の正常的使用による經濟の均衡的發展を問題とするものとして解されることとなり、第6章投資機會と所得水準はこれらの分析にあてられる。

第7章企業者豫想と物價變動では、上述の資金誤用による物價變動の他に、企業者の豫想が一齊に強氣または弱氣に傾く結果、最終財の完熟に至る迄の間に企業者の超過利潤または損失の發生を伴って生ずる著者のいわゆる生産財の價格變動が、物價理論のより基本的な問題として取上げられる。これら二種類の物價變動は、一應は

Keynes のいわゆる  $E/O$  と  $(I-S)/O$  とのそれぞれの變化に基づく物價水準の變動と對比して考えられてよいかもしれない。けれども著者の場合には、生産財の價格變動はそれが銀行主義的に商業銀行の預金通貨造出によって確定せられざるをえない點に問題の要點があるのであるから、ここでは第4章の預金通貨供給機構の分析における結論を援用して中央銀行の通貨政策に多くの期待がかけられることとなるのである。

第8章に至ってこの物價理論は景氣循環論にまで擴充され、從來の貨幣的景氣論のごとく貯蓄と投資との乖離にではなく、問題の所在はむしろ上述の生産財價格の變動過程に求められることとなる。すなわち問題の要點は根本的には資本の誤用にに基づく生産の不均衡にあることが詳細に分析され、またここから失業問題および公共支出政策の意義があらためて問われるのである。

以上のごとく本書は著者の独自の思考方法と主張とを首尾一貫して展開されたものであり、金融理論の中心問題に眞正面から取組まれた極めて價值のある勞作である。諸學説の解釋について異論もあるが、全體として著者の論述はきわめて演繹的であって、古典派經濟學の超越論的一面のみうけついで經驗論的一面が弱いと思われる。

(小泉明)

川 合 一 郎

### 『資本と信用——金融經濟論序説』

有要閣 1954年 347頁 480圓

資本主義社會＝典型的商品生産社會——それは一面において産業社會であり、他面において金融社會である——の經濟的運動法則を究明するうえにおいて、「金融經濟論」的側面の研究が必要であることはいうまでもない。にもかかわらず、從來、そのような研究は國內的にも國際的にもきわめて未開拓な状態に放置され、その數少ない研究もおおむね(1)マルクス『資本論』全3卷(1867—94)——とくに、體系的な論理形式をとっていない、たんなる拔萃の形での注意書きや評言や資料やの無秩序な推積におわっている第3卷第5篇——、(2)ヒルフェーディング『金融資本論』(1910年)、(3)トラハテンベルグ『現代の信用および信用組織』(第1版1929年、第2版1931年)などを典據として、(1)の——不十分な——祖述または注解という形で、ないしは(1)による(2)(3)などの——超越的な——批判的攝取という形でものされているにすぎなかった<sup>1)</sup>。このようなときに、川合氏の勞作『資本と信用』を迎ええたことは非常な喜

びとしなければならない。というのは、この本が——きわめて大膽に、かつ優れた技倆をみせて——その道の研究に偉大な新生面を押し開いたからである。以下、ごがかぎられた紙面を活かして、この川合氏の力作をとりあげてみよう。

川合氏は一貫してマルクスの経済理論體系に依據している。しかし、この場合、マルクスの論理は川合氏の洗脳をへて、川合氏自身の独自の論理という姿をとってあらわれている。事実、マルクスが明白な形で引合いにだされているのは、この本をつうじてただの箇所（第2篇第2章第1節の爲替相場にかんするところ）だけである。しかも、川合氏の論理は終始きわめて巧妙に展開されており、それが体系的で精緻であるだけに、ともすると「観念的構築物」と見誤られる虞れさえある（このことは川合氏の表現技術にも関連しているのではあるまいか？ 氏自身は平明かつ緻密な表現のために大いに努力されておられるようではあるが、その研究対象自体がきわめて複雑難解で、高度の理論的分析を必要とするということにも規制されてか、この本——たとえば、巻頭の第1篇——のなかにはスムーズにフォローしにくい表現が多々あると私は思う。もっとも、川合氏の執拗で綿密な説得力がこの點をよく補ってはくれるが）。

ところで、この川合氏の傑作は、「資本が……矛盾（信用にその一應の解決を求めたところの、利用と所有との矛盾……すなわち、一はある借用證書が〔貨幣証券として〕代理する貨幣そのものを発生せしめたところの商品生産的所有と利用の矛盾であり、他は一般に所有しなければ利用しえないという矛盾の資本主義的なあらわれである経営と所有との矛盾である」を回避してゆく過程を上向き追跡しようとした」（序2頁）ものであり、全體として、第1篇「貸付・利子・利子うみ資本」、第2篇「信用と貨幣——資本と貨幣」、第3篇「貨幣資本と現實資本」、第4篇「信用と資本集中——株式会社」、むすび「資本制生産における信用の役割」という構成をとって

1) もっとも、近年わが國では、三宅義夫、宇野弘藏兩氏間の「利子うみ資本論争」(『立教経済学研究』第6巻第2號——1953年3月、同、第7巻第1號——1953年10月)。飯田繁氏の『利子つき資本の理論』(日本評論新社・1954年)、渡邊佐平氏の『金融論』(岩波全書・1954年)などの成果をえて、この道の研究はきわめて活潑な氣運をみせており、また國外でも、エ・ブレーゲリ『帝國主義に奉仕する租税、公債およびインフレーション』(ソ同盟國立財政圖書出版社・モスクワ・1953年——山田茂勝譯、上下・大月書店・1955年)などの優れた業績をみることができるようになってきた。

いる。ただし、この場合、第1篇は「豫備的考察」としての意義をもち、うえでのべた論理の具體的上向は第2篇以降でなされている。すなわち、資本制生産様式における信用の役割を「(1) 流通空費の節約と、(2) 資本の集中を容易ならしめること」(33頁)の2點に要約してとらえられる川合氏は、第2—3篇では流通空費——利潤の死重となる貨幣材料金——節約の努力の姿たる資本制貨幣制度=貨幣政策(前記の「利用と所有」の第一矛盾の回避形態)を、第4篇では株式會社の分析をつうじて、信用による資本集中の姿(同上の第二矛盾の回避形態)を究明し、最後の「むすび」で二つの「矛盾の回避形態」を信用制度として總括されている。そして、その敘述にあたっては、(1) 信用制度を利用し、支え、推進している主體はあくまでも資本であること、(2) 他方、信用それ自体の發展——信用の社會化——をみること、(3) (1)—(2)をその外觀たる證券それ自体の發展に則してみること、このさいに、とくに、こんにち私たちの眼前にあるもの——すべて轉化した姿——から本來的形態を探りだし、そこから逆に、資本にとっての意義、信用それ自体の發展との結合において轉化の本質および過程を明らかにすること、(4) 以上にもとづいて、その外觀をさらに意識への反映たる(経済學、經營學、法學の三分野における)諸學說にまで追跡して、これを内在的に批判することなどの諸點が留意されている(序3—6頁)。このような敘述上の「留意」それ自体はまったく正しいし、またそれは總體としてかなりな成果をおさめてはいる。いいかえれば、川合氏の本は、(1) 原理上の思考力の強靱さ、(2) 論理の具體的上向、(3) 經濟法則の特定社會への適用の暴露、(4) 誤謬の經濟(經營、法)學說にたいする批判という點で優れてはいる。しかし、そこにはなおいくつかの問題がある。

まず、この本の「豫備的考察」たる第1篇は、けっして解説的なものではない。それは「金融經濟論」についてのある程度の素養を身につけた讀者を對象として書かれているものようである。このかぎりで一般的な個々の範疇についての説明の不備な點にはふれないとしても、經濟學上ではいまだ十分明確に規定されえていないような重要な範疇——たとえば「資金」——を簡単な説明でかたづけてしまうことは問題であろう(この點は全篇をつうじていえることでもある)。つぎに、全巻の主篇をなしている第2篇については、すでに高木幸二郎氏が本書についての優れた書評(『經濟評論』1955年1月號)でかなりくわしく論じておられるから、拙稿ではたんに主要な疑問點を提起するにとどめておく。すなわち、この篇で最も氣になるのは、川合氏の「銀行券」解釋である。

私も高木氏と同じように、「川合氏の銀行券理論の根柢には、不換銀行券＝國家紙幣の信用貨幣との基本的區別、國家紙幣の流通條件としての信用と異なる國家強制が（まったくとはいわないまでも）見落されている」と考える。そして、川合氏の銀行券理論における「貨幣數量説的」色彩をみないわけにもいかない。これは私の（第1章「信用貨幣」——とくに第2節「商業信用と銀行信用」の第2款「銀行信用と貨幣流通」における、銀行信用による貨幣節約を基礎とする銀行券流通の法則とその還流・兌換にかんする所説——の）読み方が悪いのかもしれないが、いずれにしてもこの本では、川合氏の貨幣理論——これは本質的に價值論と表裏の關係にある——を體系的に理解しえないのは、多角的な意味で残念である。ところで、この本では川合氏は史的發展の敘述という點にはあまり意を用いておられないが、このことは研究の歴史的方法と論理的方法との相互連關という問題に關連して、私の大きな關心をそそる。もちろん、問題は史的發展の敘述の多少という點にあるのではなく、この本における經濟學的範疇の展開の論理的進行が、歴史的發展の大道を——偶然的な事情や第二義的な現象を除外した形で——反映しているかどうかという點にある。確かに、川合氏は事實のうえでの檢證をつうじて独自の論理を展開されている（これは全篇をとおしてこの本の偉大な特徴である）。このかぎりでは、川合氏の勞作における論理的展開は（金融）社會の歴史的發展の現實の進行を再現し要約しているように見える。しかし、第3—4篇を例にとってみても、この點については若干の不備があるように思う。たとえば、インフレーションや株式會社の本質規定と段階規定という點についてみても、自由競争から獨占への轉化の事實に照應した論理が明確にうちだされてはいないように思われる。すなわち、インフレーションの究明の場合に、インフレーションは歴史的事實としてはインフレ政策の結果として發生するということが、インフレーションが本格的規模をとったのは第1次・第2次世界大戰後の時期——つまりは資本主義の全般的危機の時期——であるということなどは、川合氏によって全然ふれられていない。また、株式會社理論の展開にあたって、獨占體の發展とその支配の確立の過程における株式會社の役割という點についても、さらには全般的危機の段階における株式會社の役割とそれ以前の獨占段階における株式會社の役割との質的・量的差異という點についてもなんら特別の注意がはらわれていない（およそ、川合氏がこの本で「獨占の段階」といわれる場合——たとえば、第2篇第1章第2節第5款の「手形流通減少の傾向」を論じられる場合——、どのような獨

占の段階を意味しておられるのかは不明である）。つまりは、この本の場合には、事實のうえでの檢證が分析のあらゆる段階に存在しているとはいえない。この點は、川合氏による論理の展開が従前の水準に比べて秀逸なものであるだけに、きわめて遺憾なことである。なお、誤れる諸學説にたいして川合氏がくだした批判は相當に手厳しいものではあるが、そのうちとくに近代經濟學にたいするそれ——たとえば、ケインズの「使用者費用」概念にたいする批判——は、よし同じ陣營の人々を納得せしめうるとしても、異なった陣營の人々を説得せしめるには十分なものとはいえないように思う（私はこの點については、逐次發表されつつある川合氏の他の業績に大いに期待をよせている）。最後に、こまかいことではあるが、この本に適切な索引・参照文獻がついていたなら、讀者にとっては非常に有効であると思う。適當な機會にぜひそうしていただきたいものである。ともあれ、この本はまさに一讀に値する力作である。川合氏が早晚ポジティブに日本金融資本の分析に貢獻されることを願いながら、この拙い書評をおわることにする。

（古澤友吉）

川 口 弘  
『ケインズ經濟學研究』

中大出版社 1954年 405頁 500圓

本書は、その副題——『一般理論』基本體系の吟味——が示すように、いわゆる近時のケインジアン理論の研究ではなくて、ケインズ原型の理論についての研究である。そのような目的を、あえて著者が本書に與えた理由は、『一般理論』の大綱が廣く受け容れられている割合に「難解を以て聞える同書を細部に互って検討した勞作に乏しい」（序 p. 1）という現状を、進んで著者が打開されようとしたところにある。總じてケインズのごときその名に値する天才の作品には、彼の直觀がしばしばその論理づけた分析をこえて働いている。この直觀と論理のギャップを個々の細部において埋めていくこと、これが著者の主たる狙いであるように見える。そして本書の意義は何よりもまずこの點にあり、またそのためになされた『一般理論』の「基本的諸命題の徹底的な吟味の試み」（序 p. 1）に求められねばならない。

著者はまずその第一部で、本書の五ないし六分の一をさいて古典派經濟學の二分された實物的均衡と貨幣的均衡の分析を行い、次で第二部では、本書の残り全部をあけて『一般理論』の、ほぼ同書の配列順に従った解明——